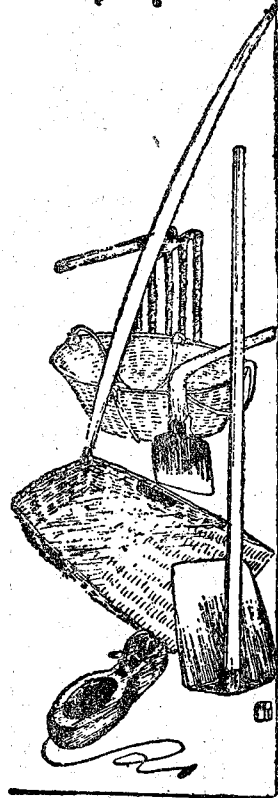


史料



東海道行脚 (九)

田中好

掛川

打わたす波さへ袖にかけ川や

いとぬれそふ秋のむら雨。

史料

堯孝法印の富士紀行で詠まれた歌だが、此處掛川は平安朝や鎌倉時代に東海道を旅した人の口の端には、餘り上つてゐない、遠江風土記傳は、懸河町、宿驛也、延喜式驛馬、註横尾、東鑑以來書懸川。と言つてゐるから、餘り人に囃されなかつたにしても、横尾驛はこゝ掛川のことを

言ふのだ、東海道の昔を物語る者が、見落してはならぬ掛

據り、川を擁して南に城門を開き、北に外郭を構へしか

川誌も、此次策を物語つて、「佐野

郡横尾驛は、横尾の名他書經見する所なし、今城中に松尾

と呼ぶ所あれば、横は松の字の誤ならん、上文本丸山の條併見るべし。

倭名鈔にいふ日根郷中に係りて、

東鑑に懸河と呼びし所にして、今

の城西にありし古驛なり、東鑑に

は、養和二年五月十一日伏見冠者

藤原廣綱日來往遠江國懸河邊とみ

へしを始めとして、建久元年右幕

下下向、嘉禎四年將軍家上洛、寛

元四年入道大納言歸洛、建長四年

三品親王下向の時、皆懸河に宿し

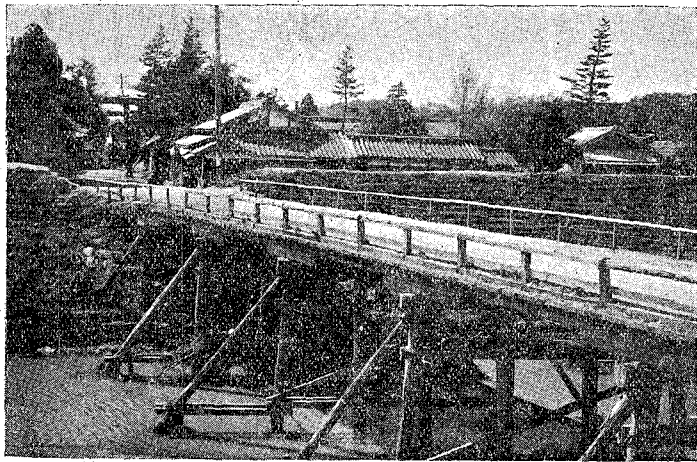
玉ひよし見えたれば、いつか驛

家の名となりて、横尾など云名

は、早く廢せしものならん、かく、

て明應文龜の頃に至り、朝比奈泰熙始めて此に城し時山に

だ、例の彌次さん喜多さんも、茶屋で酒を呑んで茶を呑ん



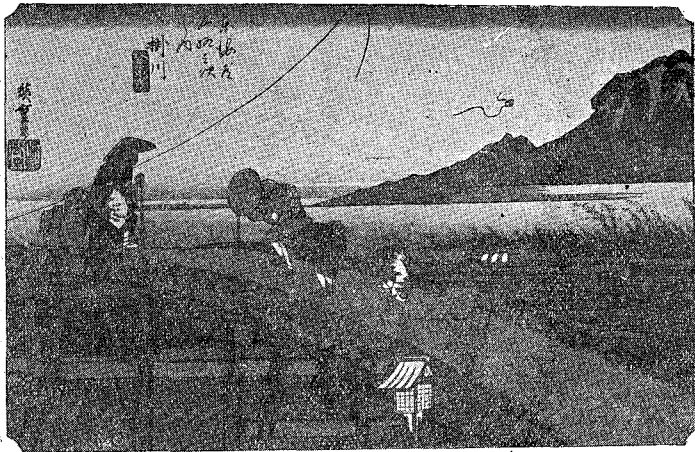
は、自ら古驛は廢して今の驛路に易り、城をも驛をも懸河と呼ぶことにはなりしなり。」と言つてゐるから矢張り平安朝時代から鎌倉時代へかけて發達した宿驛だつたのぢや。

今の私の探してゐる古い東海道は、鎌倉時代のものと少し異つてゐるらしい、遠江風土記傳は、今人所思日築城之時墾新道而十九首町及南郷西郷之地、爲今之宿驛其於三古道者今復不詳。と言つてゐるから室町時代——明應文龜年代に變更されたのだ、徳川時代に爲つても、旅する人は掛川城のことと葛の皮で織つた葛袴や糸葛袴の名産を褒めてゐる位

だと頑張つて、する事もなす事も皆あしくほや、茶にしら

れたる人のしがなき。と詠んで茶化してゐる、詰り是と言つて物語るだけのもの無い町だ、が併し今は立派な商業都市で戸數二千を算へてゐる、鎌倉時代の宿驛であつた二瀬川の附近から東漸して發展した町だろ。

東海道は町に這入つてからは随分曲りくねつてゐて、俗に八曲り道と言はれてゐるが、築城のときに新道が造られたのだから可愛い東海道も例に依つて築城の犠牲に供されたのだ、此處の曲りを早く改良せなけりや折角手を附けた日坂峠の改修も餘り効果は無かるう。



性の判つた宿驛だ。

袋井

掛川を出て直ぐ右する道が、彌次喜多さんが言つてゐる、秋葉三尺坊へ參る信州街道だ、私は夫れを左に採つて東海道を西に進むのだ、徳川時代に砂川の坂道と言はれた所も、今は全く平けられて旅には何の苦勞もない、直線で坦々たる道を行くといつの間にか袋井に出る。

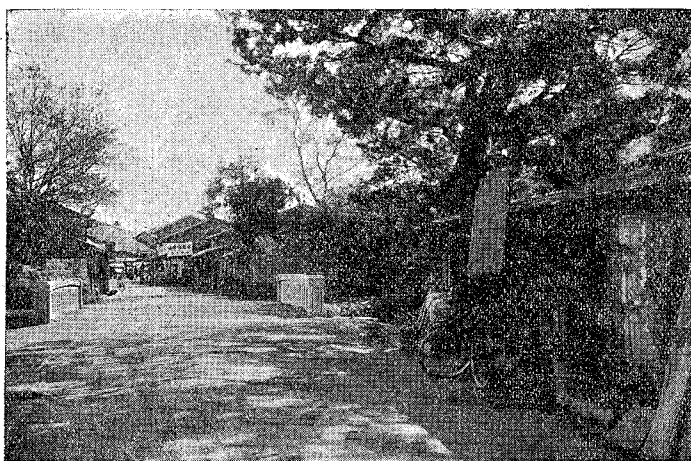
遠江風土記傳は、袋井町元和二年定宿驛、連三十六軒、爲驛家、昔者在見附與懸河之中間。茶店也、二宿之驛路地堺廣遠、往還不_レ便、故以茶店爲驛家、と言つてゐるから素

今では戸數三千あると言はれてゐるが、矢張り茶店が驛

が、物敷寄に東海道を旅した宮尾しげを君位しか通らない

に昇格しただけの町であつて、餘り綺麗な町ではない、徳川時代の販家日記でも「さきにのり物のすだれの前にはしり行きて歌うたふ者あり、物狂にやと見れば、皆いふ彼がやうに乞食しても、親をば養ふ我等にはまされり」と言つて親孝行な乞食の話をしてゐる所位に、今も同じやうな感じのする町だ。

町を出ると平坦な可い道路だ、太田川に架かつてゐる、三香野橋を渡つて三箇野の坂に掛るのだが、今は改良されて兩側には立派な並木が植つけられてゐる、こゝも舊道を改修した所で巾二間の舊道は今も保存されてゐる



今の東海道驛路なり、元大日堂西側の坂を上りて三箇野坂に至りしが、明治の初年國道一部の改良を行ひ、元の坂口より右に緩道を設け、坂上人家の middle に於て東海道の接続せしむることゝなれり、大日堂は坂上の東端丘上に在り、北東南の三方展望に可なり」と言つてゐる。

コレ馬士どん爰に天龍への近道があるじやアねへか。
アイ其所から上へ上らしやると、

一里斗りも近くおざるは。

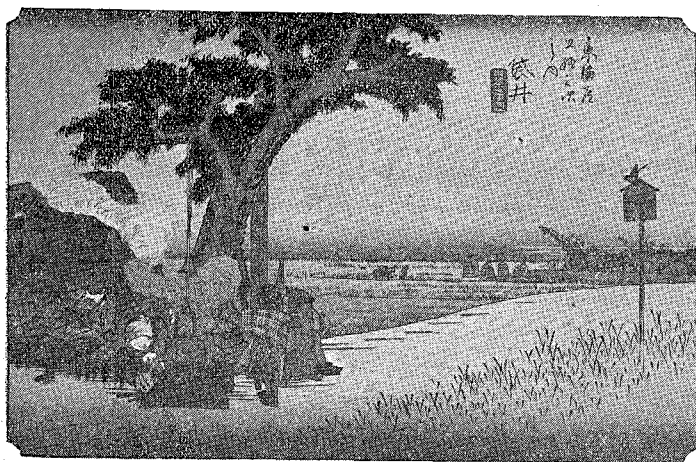
馬は通らぬか。

インネ歩道でおざる。

例の彌次喜多さんは、馬士に聞いて見附へ寄らないで、彌次さんだけは直に天龍に出てゐる、併し夫れは當時の東海道でも亦非公式な複路でも無い、今も夫れらしい近道は見附からない、私は矢張り正式に東海道を行くことにしよう。

見 附

徳川時代の東海道には見附の町へ這入る手前のところに、車も通らないやうな急坂があつたが、明治時代に南の方へ夫れを變えて、今は見附の天神さんの南西



の麓に出てゐる。何かの役に立つのだらうか、舊道は矢張り保存されてゐる、役に立たぬと言つて捨てた道を、いつ迄も保存してゐるのは變なものぢや、併し世の中には保存論者が多いから無駄口を叩かないことゝしやう。

昔

延喜式の諸國驛傳馬の章に遠江國驛馬。猪鼻、栗原、口摩とあるが、口摩が今の見附かどうかは随分考古學者を悩ましたものらしい、遠江風土記傳には驛家相連、所以號見附者、名見附宿、入海附之地也故負名西坂、東坂、馬場、北井等爲之名

袋

井

と言つてゐる、併し今は此あたりに入海も見附からない風土記は、町相連、倭名鈔書驛家而無驛名、自濱松驛家、度之見今道四里八町、通懸河

驛家、道程亦相同、當古道程三十里一百二十步、雜令曰、

凡度、地五尺爲歩（大尺也）三百歩爲里、駭牧令曰、每三十

てゐる、併し東關紀行はいまの新居宿と同じやうにこゝ見

里置一驛者、道程合。と理窟せめ
にこゝ見付が延喜式の口摩驛であ

るから、唯た夫れだけのことでは伊
摩が見附であると斷する譯には行か

ることを言つてゐるから私も一と
先づ夫れに依らう、併し口摩では

ないであろう、今の人から見ると、
今の池田町が東關紀行の言つてゐる

何のことが判らないが、貞應年中
の東關紀行では、天龍川を渡つて

今の浦の位置と風光とに似てゐる
やうにも考へられるのだが、遠江風

「遠江の國府今の浦に著きぬ、此
處に宿借りて、一日二日止りたる

土記傳では、今の池田町が天龍川の
西にあつたことを記して、池田昔宿

程。海人の小舟に棹さしつゝ、浦の
ありさまを見めぐれば、潮海湖の

所也、庄園也、庄及宿在河西（今
大明神村守屋丹波之園中有三庄塚、謂

間に洲崎遠く隔りて南には極浦の
波袖を濕し、北には長松の嵐心を

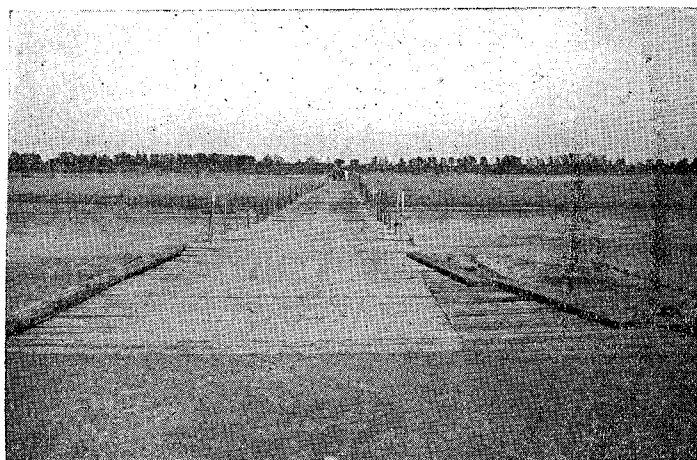
三庄園地）今在河東。と言つてゐる
から、天龍川の流路が變つて鎌倉時

傷ましむ、名残多かりし橋本の宿
にぞ相似たる。」と言つてゐるので

代の池田宿は河の西に見附は河の東
にあつたのぢや、海道記でも「池田

「今の浦」夫れは延喜式に口摩と
爲つて缺けてゐる字が「伊」で伊摩と言ふのぢやと言はれ

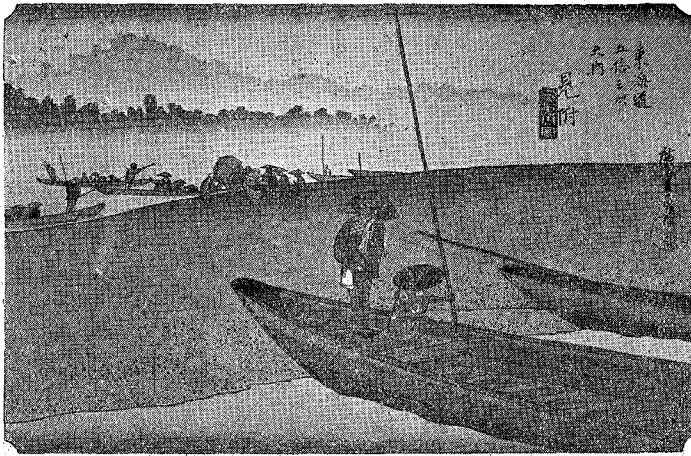
を立ちてくれ、行けば、林野同じさまなれども、ところ



〇 ぐみちとなれば、見るに従ひて珍らしく、天中川をわた

れば、大河にて水面三町ばかりあれば舟にて渡る。と言つて京都からの東路に池田から天龍川を渡つてゐる。で夫れを證據として見附が延喜式の伊摩驛であつたと言ふ説に賛成したい。

延喜式の伊摩驛——今の見附の町は戸數千九百を占めてゐて商業が盛なやうだ、町の入口にある見附の天神さんは、裸祭りのあることと有名だ、海道沿に鎮座まします勢か、境内には一里塚の齋蹟が残されてゐる。その筈だ、徳川時代の旅人、庚子道の記でも、さうでだに毛をふき疵を求む世に見附といへる里の名ぞうき。と詠んでゐる。



代の旅人、歸家日記の女主人は、池田の宿とかや、長者の

昔の
ものらしい、平家物語を見ると、瀧
つた池田の宿——今の池田町へ出た
中泉町へ依らないで天龍川の西にあ
から鎌倉時代へかけての東海道は、
の町へ出るのであるが、平安朝末期
いまの東海道は見附から南へ中泉
の宿にも着き給ひぬ、と言つて重衛
は物憂きに心を盡す夕まぐれ、池田
えて入江に噪く松の音、さらでも旅
の橋を渡り給へば、松の梢に風さ
見附
附

る、貞應年代の海道旅行者源光行も、
夜の宿をむかへて池田の宿にとま
る。と言つてゐるが、夫れ以後の旅
人は池田宿に泊つてゐない、徳川時

すみけんむかしの跡も、此近きあたりと聞けば、ゆやが言の葉もおもひ出でて、我も亦なれしあづまのはなのはる、春におくれて今かへるなり。と今の人に言はずとセンチメシタルに詠んでゐる位で、此時代の東海道は池田に依らなかつたものぢや、磐田郡誌も、私の説と同じ考なのだろう。元見附町以西は鷺坂——ヌカサカ勾坂一言村等を経て池田宿に至りしものゝ如きも、中古、中泉井通を経て池田に至ることゝ爲り、後更に中の町より井通村源兵衛新田に渡りて池田を經過せざることを爲れり」と言つてゐる。詰り池田に出た東海道は鎌倉時代のものだ。併し今も池田と對岸中野町村との間には、立派な府縣道に認定されて、天龍川には橋が架かつてゐる、併し賃取橋だ。

池田宿は鎌倉時代のものであつたにしても、昔、東海道を旅した人は池田の宿のことを物語らない者はない位だ、徳川時代の丙辰紀行でも、美濃の青墓、遠江の池田、駿河の手越、いづれも長者遊君ありて、むかしは往還の武士、輕薄の少年、鞍馬を門につなぎ、千金笑を買ふ所なれば、

かの江口の津にも、いかで窮り待らん、矢島大臣のめされし湯谷も、此池田の宿のむすめにてはんべる事、世にかくれなし。と言つてゐる、東海道驛路の鈴の筆者でさえも同じ批評を、こゝ池田の宿に與えて遊里の町だと言つてゐる、今も池田には熊野御前の墓と言ふのがあつて、住職は鎌倉や徳川時代の旅人が言つたことを打消すやうに、熊野と言ふ女は鎌足公二十五代の孫、藤原重徳の女であつて、熊野權現さんの神徳で生れた女ぢやから熊野と命名したのだ、別嬪で和歌文學に通じてゐて両親に孝であつた、治承四年平宗盛卿の切な懇望で女官となつて京に上つてゐたが、母が病氣で歸國を進めたので、いかにせん都の春もをしけれど、なれし吾妻の花や散るらん。といふ名歌を仕つたので、遂に許されてこゝ池田に歸つた。が併し間もなく父は死ぬる平家の一門は源氏の爲に西海の藻屑と爲る母も次で死ぬる、と言ふ悲惨事に遭つて、熊野も諸行無常を歎いて黒髪を切り落し、佛道を修行してゐたが此寺で冥途に行つたものだ、婦人病のある人は熊野を信仰することに依つて治る

と宣傳してゐるが、熊野が住んで居たのは天龍川西の池田かこゝの池田かは言ふ迄もないであらう。だが傳説は傳説として溫和しく承はつて置かう。

○

見附を出て南に中泉町に出るのが徳川時代から今にかけての東海道だ、近頃は國道と言つても耻かしくない直線道路に改良されてゐる、お蔭で海道沿には徳川時代の面影を見る事が出来ない、が併し兩側には人家が建て話つて見附中泉の境界をさえ見出すことが出来ない位に、立派な街路を形づくつてゐる。夫れに旅したスターお札博士は、老車夫に挽かれて細い脚がヨロ／＼する毎にヒヤ／＼したと言つてゐるが、我が日本では此處の國道あたりが最上等の部類だ。

中泉町今では戸數千五百と稱されてゐるが、昔からの宿驛でも何でもない、言はゞ新人の格だ、里人は平安朝時代に編纂された和名類聚抄に、豊國と言つた所は中泉のことだ、遠江風土記傳にも、訓止與久爾、又は註止與太國府、

當今中泉町。とあるから古い歴史をもつ町だと言つてゐる成る程倭名抄には、古國府、池田正東一里、國府八幡之地也、按鎌倉將軍之時、移于城之崎乎而後天文十五月五日府廢、於古官府之地齊八幡大神、永錄十二年於城之崎築新城、城廢而後建福王寺と言つてはゐるが併し丙辰紀行などは、見附、濱松の間に中泉といへる所は、鹿雁の多き所にて遊獵よろしき地なれば、大相國年毎に放鷹せさせ給ひてありしが余もお供に侍りしに——と言つてゐるから中泉町舊圖が示してゐるやうに今之浦池や八幡領大池の附近で獵地として名高かつた土地なのだらう。

昔の獵地、中泉に敬意を表して天龍川に向ふ、川に行く迄は立派な道だか、道の片寄には貧相な人車軌道が敷かれてゐる、今頃に人の力で車を引つ張るやうな軌道が、東海道筋にあらうとは誰も思はないであらう、併し海道は此軌道會社が舊道を取擴けて呉れた勢で立派になつたのだ、併し乗合自動車が発達してゐる今では、餘程生活に呑氣な人か

夫れとも物數寄でなけりや乗るお客もなからう、聞けば材木の運搬を主としてゐるそうだが夫れでも收支が償はないので休業して善後策を考へてゐるそうだ、此ことがいまの鐵道省のお役人の耳にでも這入ることなら、軌道に並行して乗合自動車免許したのは資本の二重投資だと言つて額に湯氣を立てるだらうが、科學の進歩から來る優勝劣敗は當然だと思つてゐる私には何の衝動も與えない、早く路上から軌條をはずして呉れて乗合自動車が無難に通るやうにしたものだ。

よしさらば身をうき木にて渡りなん

あまつみそらの中川の水。

水上は雲よりいで、鱗ほど

波のさかまく天龍の川。

鎌倉時代の海道記や徳川時代の彌次喜多さんが中川——天龍川を詠んだ歌だ、此川も昔から随分旅人を惱ました、併し旅人が難儀した東海道の渡しは今の池田橋や天龍橋の

ある所に限られた譯ではない、路上交通を邪魔した天龍川は、昔龜玉川とも廣瀬川とも呼ばれて流路が屢々變つたものらしい、續日本記は、靈龜元年五月遠江地震山崩塞_レ龜玉河_ニ水爲_レ之不_レ流經_ニ數十日_ニ潰_ニ浸_ニ救_ニ敷_ニ地長上右田三郡民家百七十餘區_ニ並損_レ苗_ニとあつてその時の龜玉川——天龍川は今の馬込川であつたらしい、だから一概に天龍の渡と言つてもいろいろに變つた、東海道が見付から池田に出てゐたときは池田橋の附近に渡しがあつた、見付から中泉を通つた時代にはいまの天龍橋の附近を渡つたのだらう。

平安朝時代の旅人、更級日記は、いみじく苦しければ、天龍といふ川の面に假屋つくり設けたりければ、そこに日頃する程にぞやう／＼おこたる、と言つて冬の河風にさらされたことを物語つたり、鎌倉時代の旅物語、海道記では、天中川をわたれば、大河にて水面三町ばかりあれば、舟にて渡る、はやく波さがしくて、棹もさしえねば、大なる帆もちて横ざまに水をかきて渡る。と言つてゐる、東關紀行や十六夜日記も舟でこゝ天龍を越してゐる、徳川時

代も矢張り渡舟だつたことは澤山な旅日記が物語つてゐる、唯だ渡船と言つても急流の爲に積載人員を八ヶ間敷制限したのもらしい、一番氣の毒なのは西行法師で、この渡船に乗込んだところ、最早場所はない、下りよ下りよと鞭を以て叩かれ頭から血がだら／＼、止むを得ず船から下りた逸話も残されてゐる、併し武士は偉かつたもので、東行筆記は、建武二年義貞東國の軍に利なくして歸り上られし事を太平記にしろして、天龍川の東の宿に着き給ひ、俄に在家を壞て浮橋をぞ渡されける、將卒皆渡り果て後舟田入道と大將義貞朝臣と二人橋を渡り給ひけるに、いかなる野心の者がしたりけん浮橋を一間張綱を切つて打てたりける。と言つて臨時に浮橋を拵えたことを録してゐる。

濱名郡誌の傳へてゐるところに依ると、この渡船は、昔大天龍川の河岸にあつた船越一邑村の住民がやつてゐたもので、天正年中に家康から渡船を一任され、渡船心得を貰つてゐたばかりか、専心に業務に當れと言つて朱印七十石を授けられたそうだ、元和年中新原村の彦助堤の普請が

出来てからは天龍の水行が薄くなつて橋渡となつた、夫れが爲に船越一邑の住民が生活に窮して池田村と争を起したと言つてゐる、が併し元和以後に東海道を旅した、歸家日記は、天龍川ふたつ有りてまづ舟にて渡る、水淺くて船行なやみければ皆おりたちて、舟ばたをとらへておし出す。と言つて水は淺かつたが矢張り渡船であつた。元和元年の東海紀行でも、天龍の川舟にてわたる、と言つてゐる、例の彌次喜多さんも同様だ、折角だが私は郡誌の記事を疑ひたい。

例の徳川氏の交通政策では此處に橋を架けるやうな筈はない。若し私人でも架けたものなら刑罰に處せられたであらう、明治の御代と爲つて、茅場村の住人鈴木賢一郎、中野町村淺野茂平と言ふ人が交通の不便を歎いて、長さ六百四十六間幅二間の橋を架けたそうだ、矢張り賃取橋架だつたが、其の後縣が之を買收して經營することゝ爲つた、併しいまの橋も、假橋で交通する人は危険感を起さずには居られない、例のスター博士も、此橋はひどいデコボコで歩

く度にグラつく、わし等が橋を渡つた時、命拾ひをしたやうな氣がしたと、言つてゐる、實際其の通りだ。

夫れでも今は昭和の時代だ、此橋を乗合自動車が平氣で通つてゐるが、通行する度に橋面は波を打つて、不知命か厭世家でなければ乗客の資格がないとしか考へられない。

そこで架橋の計畫が樹てられた、其の計畫では工費百八十六萬圓で昭和三年度以降五ヶ年間に、長さ五百十四間幅四間の鋼桁橋と取合道路を築造するのぢやそうだ。が、併し今も昔と同じやうに東海道は中泉を通るか、夫れを捨て、池田を通るか、夫れとも折衷説に依つて中間を通るか、問題と爲つてゐて、未だ架橋地點がきまらない、路線を採擇するのに昔の歴史を忘れ過ぎるのも感心しないが、又夫れに捉はれるのも排すべきだ、ウム地方政黨の競争の具と爲つてゐるつて、そんなことは眞平ご免だ、交通上の價值と技術上、經濟上の點から見て適當な所に早くきめて貰ひたい。

傾城の道中ならで草鞋がけ

茶屋に途絶へぬ中の町客。

天龍川を渡ると、例の彌次喜多さんが、こゝ詠んだ中野町だ。此處は江戸へも六十里京都へも六十里にて、振分の所なれば中の町と云へるよし。と言つてゐるが、本當かどうか判らない、昭和の測定では此處中の町から東京へは七十里、京都へは六十五里と言はれてゐるから二里半四へ寄り過ぎてゐる、彌次さんの話も餘りあてにならぬ、戸數九百いまでは天龍を下つてくる材木を相手に生活してゐる中野町だ。

天龍下れば重吹しよきががゝる

持たせやりたや檜笠。

こゝ歌はれこんな情景で長野縣から天龍川を下つてくる材木で、此處中野の町の經濟を支配してゐるのぢや、そう想ふと天龍川も餘り馬鹿にはならない、中野から濱松へかけては可い道だ、彌次喜多でも、イヤもう濱松が、思ひの外早く來たわへ。と言つてゐる位に旅疲れのしない道だ、

今は此處にも國道併用の軌道が敷かれてゐるが、是も矢張り營業を休むでゐる、乗合自動車のお蔭だ、ガソリン軌道に變更しやうと言ふ話もあるそうだが、そんな先の見えなことを目論むよりは、乗合自動車に商賣替へをするのが賢明だ。

濱 松

引馬野爾仁保布榛原入園

衣爾保波勢多鼻能知師爾。

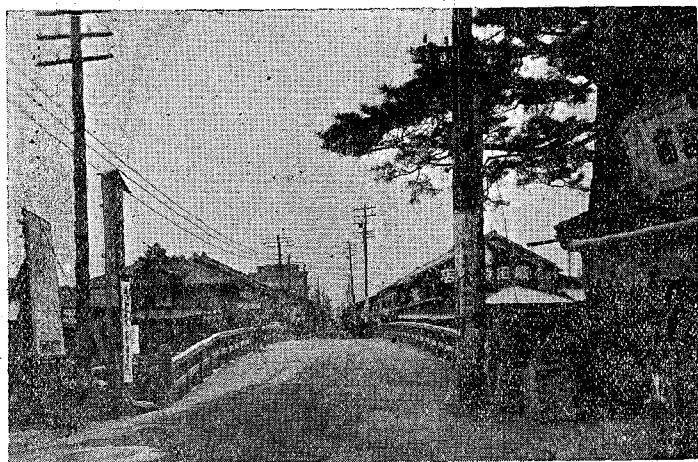
大寶二年持統帝が參河國に幸されたときに、長忌寸奥麿が詠んだ歌で萬葉集に收められてゐる。引馬野、隨分上古の詩歌に傳へられ東鑑やら其の他の古書にも囃立てられてゐるが、曳馬驛となつて旅する人に役立つたのは何の時代か判らない、併し今の濱松であつたことは確實だ、延喜式では東海道の路次は猪鼻驛の次に栗原驛、其の次に例の口摩と爲つてゐる、今の新居昔の橋本から栗原驛に出て口摩

一見付に行つたものぢや、その路次の栗原驛が引馬宿のやうに言ひ囃されてゐる、が併し延喜式の外には餘り見えな驛だ、兎も角、濱松驛附近にあつた古驛としておこ、鎌倉時代の旅日記——海道記は、波はま松には風のうらうへに立止れとや吹きしきるらん。と言つて濱松のことを言つてゐる、併し京から鎌倉へ旅するのに、濱松の宿を立つて廻澤の宿（舞坂）に逆戻りしてゐるが十六夜日記では、今宵は引馬宿といふ所にとゞまる。この所の大方の名をば濱松とぞいひし、したしと言ひしばかりの人々なども住む所なり。と言つて引馬宿のことを書いてゐる、永享四年足利義教の富士紀行にも、長月六日ばかり橋本をたちて引馬の宿になりぬ、引馬野は三河國とこそ思ひ侍るに遠江に侍るはいかなる事にぞ。と言つて引馬野の所在を疑つてゐる、明應年中の雅康卿の士峰録にも、明應八年六月十三日引馬を立て登りけるに吉美の妙立寺にて明けほの、富士見え侍る。と言つてゐるから曳馬驛——引馬驛は、鎌倉時代から室町時代を過ぎて永祿の末まで呼ばれた古驛だ。

永祿十二年、家康は遠江の國府に在つた見付の端城を引

とならんかし。と言つて濱松縁起を賞てゝゐる。森林太郎

拂つて、こゝ引馬城に引き移つたが、引馬一ひくま、と言ふ稱呼は縁起が悪いと言ふので、普濟寺の坊さん義翁徳祐に改名を相談したが、濱松在八幡にある「颯々の松」に因んで濱松城と附けて呉れた。そこで城下の驛を濱松驛と改名し夫れから濱松と言ふやうに爲つたのだ、享保年間に旅した、庚子道の記も、引馬野ははやくより濱松ともいふなり、けに濱べの松どものおほく生ひたりしが、風にふかれて颯々となる音のいみじうめでたく聞ゆ。人のかしづくむこぎみなどの來り給ふに、酒のみたちて、濱松の音はとをのこどもうたふは、この所よりのこ



こゝ曳馬が濱松町と爲り市と爲つても、いつまでも構つて

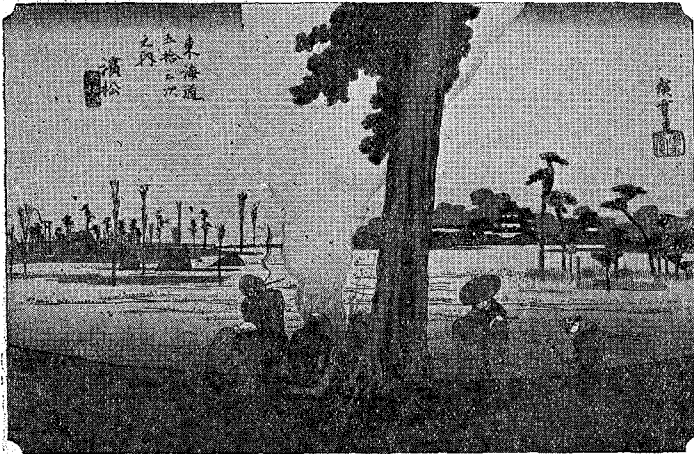
さんなどは、駒引くはめでたきためし、曳馬とはよき名ならずや、その名をばなどてかへけむ。ナンテ行進歌に詠んでゐるが、家康が總てのことに注意深かつたことを褒めてもよからう。

今でこそ人口九萬二千、グレート濱松などと威張つてゐるが、家康が引馬城を居城として呉れたお蔭で發達しだした町だ、夫れが明治二十二年に爲つて自治體——濱松町として

是認され、町勢圏内にあつた附近の淺場や冨塚の部落を合併して明治四十三年市制を施行し、濱松市と爲つたのぢや、併し私の旅する東海道は、

臭れない。徳川時代の東海道みたいな悪路だ、夫れに此土

地の人は昔の海道商人根性を失はないでゐるのか、自分の店先きを通つてゐる濱道は自分のものだと言はぬばかりに商品を陳列して、狭い街道を一層狭めてゐる。店で用達してゐる荷馬車挽きも海道の真中やら縦に車を捨て、置いて雑談に耽つてゐるのは始末に了えない有様だ。遠州濱松廣いやうで狭い、横に車が二丁立ぬ」と言はれてゐるのも道理だ。道路改良會が東海道の旅をしたときも、一行に加はつてゐた時の内務省土木局長の堀田貢さんが交通整理は何處に行はれて居るかツと、警察署長に呶鳴つたのも無理はない。



昔の濱松

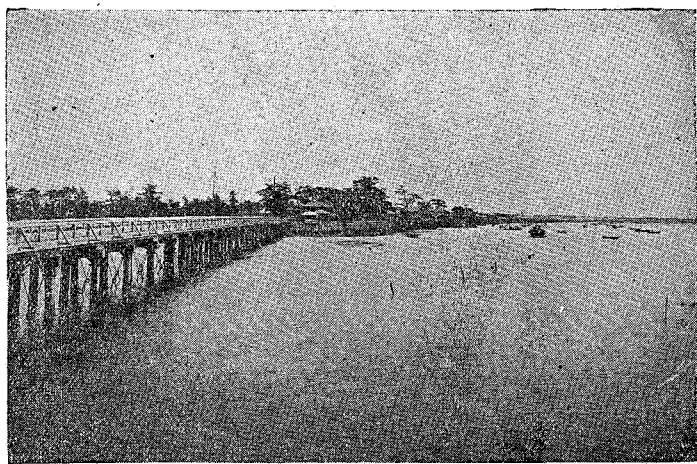
曲り曲つた市内海道を通り抜ける
と、例の彌次さん喜多さんが前夜幽
靈に襲はれ眠られなかつた眼をこす
つて通つた、若林や篠原の里だ、道
巾は餘り廣いと言ふ譯ではないが、
明治の時代に改良されたお蔭で、直
線道路だ、改良のときに松竝木をう
まく保存したものか、今も徳川の盛
時を物語る松竝木が、東海道の兩側
にあつて古きを誇つてゐるやうだ、
併し路面は一向に構はれてはゐない
砂道だ、一臺の自動車がつゝ走ると
其あとには白塵里餘に及ぶと言つた調
子。

濱松が言ひ囃されてゐるやうに工
業都市の面目を發揮すればする程、都民の保健は脅かさる

道理だ、夫れを少しでも軽減するのには、天が與えて呉れた濱名湖附近の勝地を濱松市民に利用することが最も賢明な策なのだが、濱松と夫れとを連絡する唯一つの國道が此有様では情ない。

舞坂

舞坂町、町と呼ばれるからには商賣盛んな所だろうと肯かれるのが普通ぢやが、こゝ舞坂は漁村の毛の生えた——言はゞ漁師町だ、戸數七百を數えてゐるが、其の近くに天下に聞えた名勝地辨天島があるお蔭で、附隨的に有名な處と爲つた、延喜式の東海道は猪鼻驛から栗原驛——いまの濱

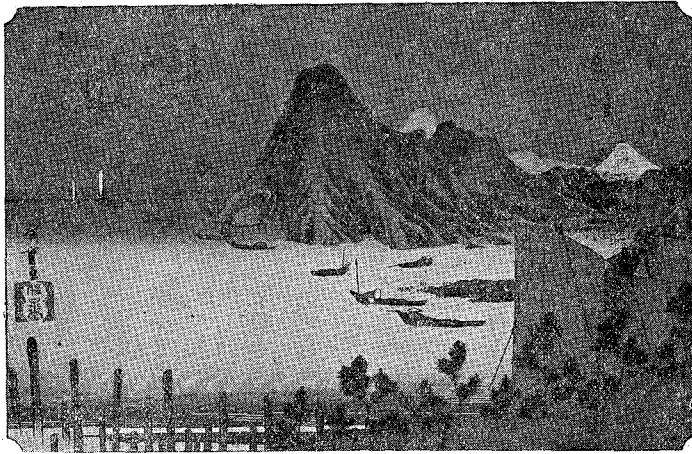


今 舞 坂 の

松へ出てゐたのだから、こゝ舞坂は當時の宿驛でなかつたことは明かだ、併し東鑑には、嘉禎四年二月七日、(右大將)着御橋本驛、先之人々點定家々間陸奥太郎實時主宿舞澤松原と言つてゐる、遠江風土記傳にも○舞坂、文和風土記支佐岡神社當蜆塚、……中古號廻澤。驛家同所、水驛也、通新井宿海路(一里或廿七町)通濱松城二里卅町道程以三十六町爲一里。昔所以號象島者、此地海中岐佐貝多生、後依澤號廻澤(今云舞坂)其澤爲海。と言つてゐるから鎌倉時代——南北朝時代には廻澤——舞澤——前坂と言はれ後に舞坂と爲つたのぢや、驛であつたにしても濱名湖の變移に遭つて、陸驛であつたこともあ

ろうが。其の驛家も地變や洪水に依つて屢變つたので、今
日の舞坂の狀勢も其のお蔭を蒙つ
て貧弱なのであらう。

○
私の旅する東海道は、こゝ舞坂
を後にして辨天島を通つて新居町
に出るのだが、遠江風土記傳は、
昔廻澤與橋本之間陸地驛路也、半
途有庄塚石、石與村越崎南北相對、
是濱名與洲二郡之堺歟、堺内有村、
號蛭田赤阪、柴江舊荒井、應永十
二年明應八年永正七年等有波斷
驛路、併鄉村水沒爲海、故二郡之
舊地大變矣。と云つてゐるから此
所の海道は昔から随分變つたもの
らしい、で東海道の古きを索して
ゐる私の旅では、昔の變遷の糸をたぐつて路筋を見定めな



昔の舞坂

平安朝時代に旅した菅原孝標の女
は、天龍川を渡つて、「その渡しつゝ
濱名の橋に著いたり、濱名の橋くだ
りしときは、黒木を渡したりし、こ
の度は跡だに見えねば舟にてわた
る、入江に渡せし橋なり、外の海は
いとみじく荒く、浪高くて入江の
いたづらなる洲どもに、ことものも
なく松原の茂れる中より、浪の寄せ
かへるも、いろくの玉のやうに見
え、實に松の末より浪は越ゆるやう
に見えて、いみじくおもしろし、そ
れよりかみは、井の鼻といふ坂の、
えもいはず佗しきをのほりぬれば、
三河國高師濱といふ。しかすがの渡

實に思ひ煩ひぬべくをかし。と言つてゐるから平安朝時代

には今の東海道と同じ路（路）を通つたらしい。

鎌倉時代の海道記では『十一日に橋本をたつ、橋のわたりより行々たちかへり見れば、あとに白浪の聲は、すぐるなごりをよびかへし、路に青松の枝は、あゆむ裳を引きとむ、北にかへりみれば、湖上はるかに浮んで、波のしわ水の顔に老いたり、西にのぞめば、湖海ひろくはびこりて、雲のうきはし風のたくみにわたす、水郷のけしきは、彼も是も同じけれども、湖海の淡鹹は氣味これことなり、漚のうへには浪に轟ぶみさご涼しき水をあふぎ、舟の内には唐轡（轡）おす聲秋の雁をながめて夏の空にゆく、本より興望は旅中になれば、感傷しきりに廻りて、おもひやみ難し、此所をうち過ぎて濱松の浦にきたりぬ』と言つて、此時代も海道は今のものと變りは無いやうだ、源光行の東關紀行でも橋本を出て此宿をも打ち出で、行き過ぐる程に、舞澤の原といふ所に來にけり、北南は渺々と遙にして西は海の渚近し。と録してゐる十六夜日記も亦濱名の橋から鷗を詠んで。かもめゐる洲崎の岩もよそならず浪のかけ越すそでに

みなれて。と言つてゐる。

南北朝時代や室町時代の旅日記には餘り此處舞坂のことは言ひ囃されてゐないが、徳川時代になると、東海道を旅した總ての人が、こゝ舞坂から新居のことに觸れねば任務が果せぬと言つた調子で物語つてゐる、其の代表的なのは、何と言つても岡部日記だ。雄踏などいふ村右に見てさしわたす、この所はむかしの湖にて、遠つ淡海とよびしもこれによれられんを、今はうしほうち入りて、ゆほびかなる入海なり、西は高師山たかく雲間に見え、左は無澤の松さながら波のうへにたたり、其西はかの濱名の橋かけたりけん所にて、今は大海にうちつゞきて、大船小ぶねはら々に行きかひたり、右のかたはいく里ともなく、入江はるばると見たさる、其の入江のおくぞ引佐細江（引佐細江）なりける。矢張り加茂真淵も今の東海道を通つたのだ、そうすると昔も今も東海道の道筋には變りが無い譯だ、明應八年に旅した飛鳥井雅重の富士歴覽記では、いまの雄踏村宇布見から鷲津へ渡つてゐるし、永正年代の宗長手記では姫街道の本坂

越えを通つてはゐるが、夫れは東海道ではなかつたのだ。

姫街道、夫れは濱松から氣賀町や西濱名村三ヶ日に出で濱名湖の北岸を通つて、本坂峠を越え御油町に出る街道だが、東海道の複路として昔から相當に言ひ離されたものだ、濱名の湖口が切れなかつた時代には餘り重要なもので無かつたらしいが、湖口が切れてからは渡船の便を厭ふ女子供やら、今切れと言ふ忌諱の語「切」に恐れた子女が東海道の旅に採つた路筋だ。續日本後記は、嘗聞應永十二年文明七年明應八年永正七年寶永四年等有急波、細江變爲潮海、嘗此時古驛没古道廢驛路變、自是以來置三箇日及氣賀驛乎。と言つてゐるが、一時的の驛路だつたのだらう。

○
舞坂の町から辨天島にかけて見すほらしい木橋が架けられてゐる、辨天島から新居えは昔に變らない渡船だ、舞坂新居の兩町が賃錢を取つて經營してゐるのだが、自動車に乗せて渡すやうな渡船ぢやない、夫れで今の東海道交通には昔お姫さんが通つた姫街道が利用されてゐる、是では明

應や永正年代の東海道と同じことで文化の進展なんて言ふことはありやしない、そこで靜岡縣は大正十五年度からこゝ濱名の架橋を企て、工事費百四十三萬圓で、辨天島と其の西に出來た寄州とを連絡する爲に三つの橋を架けることとしてゐる。第一の橋はいま架かつてゐる辨天島と舞坂間のものを改築するので長さ九十六間、辨天島から寄州に架けるのも矢張り九十六間、寄州から新居に架けるのが第三橋で長さ二百六十六間、巾は何れも四間のものを持つへるのだ、いま工事最中だが、辨天島を通ることに就ては又々問題を起してゐる、ヤレ今の海道を擴張すると松並木を切らねばならぬ、イヤ海岸に海道を附けると風致を害する、旅館の生計が立つて行かぬと公私混同して騒いで居るやうだ、併しいつ迄も鎌倉や室町時代の眞似をしてゐるのは困るぢやないか、一日も早う解決することを辨天さんに祈つて、私は旅を急ぐこととする。

○
鎌倉の末代から昭和の今日まで、架橋問題で悩まされるや

うに爲つたのは、後土御門天皇の明應八年六月十日に起つた大地震と、後柏原天皇の永正七年八月二十日にあつた海嘯とのお蔭だ、夫れ以前の濱名湖口は、文徳帝時代の國司が奏言したやうに湖有一口閉塞無常、湖口塞則民被水害。と言つた調子の小さな湖口であつたのだ、夫れが地震や海嘯の爲に切れて湖海を一つにしてしまつた、丙辰紀行は此ことを傳へて、遠州荒井の濱より奥の山、五里はかり海となりて大船も出入る事、むかしは山に續きたる陸地なりしが、中比山より法螺の貝おびたゞしくぬけ出で、海へ入りける、其跡かくの如く海となりて今切と言はれるよし、古老言ひ傳へたり。と言つてゐるが、法螺貝が出たのは本當の法螺話であらうが、明應永正年間に切れたことは事實だ、三代實錄は元慶八年九月朔、遠江國濱名橋、長五十六丈廣一丈三尺、高一丈六尺、貞觀四年修造、歷三十餘年、既破壊、勅以_二彼國正稅稻一萬二千六百三十束_一改作焉。と言つてゐるから天災以前の湖口は五十六丈位しかなかつたのぢや、だから平安朝や鎌倉時代に海道を旅した人は、こゝ濱

名の橋を詠んだり筆にしたのぢや。

橋はあつたにしても不時の災害で焼けたり流されたことがあつたらしい、重之家集に。實方朝臣のもとに、みちの國へ行くに、いつしか濱名の橋わたらんとて來るに、はや焼けにければとて、水の上の濱名の橋も焼けにけり。と詠んでゐる、僧基法師の遠江道記にも、濱名の橋くづれ。と言つてゐる、前にも言つた更級日記が「濱名橋くぢりし時は黒木を渡したりし、この度は跡だに見えねば舟にて渡る。」と言つてゐるのも、矢張り前には橋があつて後には夫れが無かつたことを物語るものだ、詰り今切と言はれるやうに爲つた永正年代以降は橋を架けることが出来なかつたのだ。

徳川の時代と爲つては例の防衛策で橋を架けやうともしない、東海道名所圖會は「其後元祿年中地震津波ありて、海上あらく風強くして波高く渡船の災となれば、寶永年中官家より有司來り、今切の波頭に數萬の杭を打て逆流をとめ、又舞坂の方より左へ海中半道の間波戸を築きて、渡

船の風波を穩にし、行き々をとゞすめ自由ならしむ。」と録して、徳川幕府の渡船政策を傳へてゐる、彌次喜多さんが言つてるやうに。乗合船に打乗り渡る、實にも旅中の氣散じは、船中思ひくゝの雑談、高聲に談り合、笑ひ罵り打興じ行く程に頓て半は渡りて乗合の人々にも話し草臥れ、各

々柳行李に肘をもたけて居睡りをするもあり、又此風景に見とれて只默然として居るも有。と言つた調子の呑氣な交通だつた。賢明な徳川幕府は、此今切の切戸の雜所を利用して新居の關所を設けたのぢや。

流行東海道行脚

大昔からの東海道、今頃に爲つて又人に嗤し立てられるやうに爲つた、お江戸日本橋セツ立ち初上り行列揃へてあれわいさのさ、こちや高輪夜明の提灯消すコチャエ〜。と唄はれた明治の初年時代は別として、汽車が出来てからは誰も話し相手にして呉れなかつた道路が、近頃に爲つて面白半分に旅する者が殖えだした。態々徳川時代の服装で歩いて來る念入りもある、夫れが自動車や電車の走つてゐる日本橋で記念撮影をやる、夫れを亦物數奇な都人士が寄つてたかつて騒ぎ出す、夫れで東京大阪間のマラソン競争が始まる、モダーン彌次喜多と言ふのが蒲田の女優と行列作つて自動車旅行をやると言つた調子である、俺は手前共の遊び相手ぢや無いと、東海道の古道も巫山戯た旅を笑つてゐるだらう。が併し此様に爲つて來たのも、矢張り國道が改良されて通り易くなつたお蔭だ、要らぬ國道を改良して巫山戯た眞似をさすのは不都合だと、齒をむいて怒る政黨もあるう、成る程夫れもそうだ、遊び半分に使はれる國道なら改良しなくつても可い、併し待ち給へ、私共の言つてゐる改良目的は、交通の經濟的效果を收めたいのである、夫れに附隨して巫山戯やうと遊ぼうとは各々の勝手ぞコチャ知らぬ、夢、間違つて呉れては困るぞ。